

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

栃木県高体連登山部の雪崩事故について その2

2017.4.3 広島県 西部伸也

事故原因として、雪崩注意報が出ているにもかかわらず行動したこと、また「高校生は原則として冬山登山を行わないように」という文科省（スポーツ庁）の通達への違反が指摘されることがあるが、これらは本質的なものではない。

雪崩注意報が出ていても安全な場所が多くあることは、雪山登山をする人なら誰でも知っており、たとえ「通達違反」であっても、安全な場所で行動する限り問題はない。

さらには、雪崩に遭った際の重要な装備であるビーコンを携行していなかったという批判が多く見受けられるが、そもそも高校生は雪崩の危険があるような雪山には行かないという前提があるから、ビーコンを携行していなかったとしても責められることはない。もちろん、ビーコンの使用法に習熟する意味で、ビーコンを携行するのはいいことだが、高価なものなので、高校登山部にそこまでの余裕はないだろう。

事故発生から通報までにかかなりの時間（数十分）がかかっている、事故後の連絡体制に不備があったのではないかという指摘もあるが、これらについてはなぜかがまだ判明していないと思う。

スキー場の第2ゲレンデが雪崩の危険のために閉鎖されていた期間があったことが明かされ、責任者たちの情報収集に問題があったのではないかという指摘もある。これについては、責任者たちが閉鎖の情報を得ていたかどうかは不明だが、第2ゲレンデのもう少し北寄りの斜面の危険性は認識していたのではないかと思われる。ただ、あの斜面の危険性を認識していなかったのがやはり問題である。

さて、事態は今後どう進んでいくだろうか。主催者側と遺族との示談になるのか、あるいは裁判になるのか。いずれになるかはわからないが、ともあれ主催者側は自らの責任について潔く認めて対応していくことが必要だと思う。

次に、これが一番大事なこともかもしれないが、2度と事故を起こさないための対策をどうするか。

顧問自身の研修はもちろん大事である。雪崩について事例を学び、理解を深めること。そして、実際の登山計画をチェックするシステムを絶対に作らなければならない。行動予定のルートは、予備のルートも含めて、必ず計画に記載し、一定の期間前に雪崩についての知識を有する経験者（他の顧問・顧問OB・当該県山岳連盟（協会）の経験者）にチェックしてもらおうようにし、計画に記載してない行動はとらないようにしなければならない。

今回の事故に関し、世間一般の反応を見てみると、もっともなものもありはするが、不必要に顧問・教員を批判する風潮があり、残念でならない。典型的なのは、今回の顧問・教員が「ベテラン」「エキスパート」であったと決めつけ、そこから全国のすべての顧問・教員が信用ならないと断じるものである。残念ながらこのような憎悪とも言える姿勢からは、高校登山部を健全に育成していくことは困難で、高校登山部は衰退するのみであろう。（それが彼らの望みというなら、あまりに情けない話だが。）

次に、今回の事故をもって、高校生の冬山・雪山登山を一律に禁止しようとする動きが再燃していることも残念である。

いみじくも長野県教委は「登山は一つの文化であり、一律禁止はあり得ない」と述べたが、まさにその通りである。

冬山・雪山を含めた登山活動は、人間的欲求のまっとうなものであり、決してそれを抑えつけることはできない。仮に高校の部活動でそれを抑えつけ、高校部活動での事故を減らしたとしても、今度は高校生の個人山行による事故、あるいは高校で学べていないがために、大学生や大人の事故が増えるかもしれない。

安易な規制は決して社会全体の活力・発展にはつながらないだろう。

安易な規制により、登山界そして社会全体が停滞していくのでは、今回犠牲になって7人の高校生と1人の若い先生も浮かばれないことであろう。彼らの犠牲に報いるためにも、活動を継続しながら事故を根絶する方法を模索すべきである。

編集子のひとごと

安全を学習するはずの講習会で、未来のある7名の高校生と夢をもって教師になった1人の若い先生の死という重い十字架を背負うことになってしまった。

おそらく全国の山岳関係者は、等しく今回の事故については心を痛めていることに違いない。世間の風当たりも厳しい。この時期は、各県の講習会が行われている時期である。我が大町岳陽高校は一足早く、22、23の両日例年同様乗鞍岳において、雪洞泊の訓練を行った。天候が悪く、位ヶ原さえ登れずに帰ってきた。悪天でも生徒たちはそれを十分楽しみに変えてくれた。事故後、一人の生徒が「来年は乗鞍には行かれないのですか？」と尋ねてきた。「大丈夫だ」というとほっとした顔をして帰っていった。しかし、新聞報道によれば、群馬県、新潟県、宮城県、福島県など全国各地で教育委員会から、自粛せよなどの実質的な中止命令が出されたそうである。兵庫県高体連は、例年通り柵池から天狗原で合同合宿を組んだ。僕の知る限り、香川県はこの時期大山での合同合宿を組んでいたはずだが、今年はどうなったのだろうか。気になるところである。

全国高体連の副部長として前事務局長の奈良県の前田さんとも話をしたが、高体連として冬山登山の実態がどうなっているか、そのうえでこの事故をどう総括するか、議論する必要性を感じている。高体連登山専門部は本来大会を行うための組織ではあるが、将来の登山界をになう若者を育てるという観点で、このことについては、高体連としての考え方をきちんと打ち出していかなければならないと思う。

以前かわらばんに書いたことがあるが、2011の大震災以降、高校山岳部の生徒は間違いなく増えている。しかし、この時期のこの事故で、新入部員の加入状況がどうなるかが非常に危惧される場所である。保護者の理解を得るべく、丁寧に対応せねばならない。高体連の表看板はインターハイであるが、その追求するところが「安全登山」であり、それを通して全人的なサポートをしているということを全国に訴えかける必要があるのではないだろうか。もちろん個々の学校の先生方は、努力されておられるだろうが、それには限界がある。4月2日に日山協主催の山岳スキー大会があり、日山協会長の八木原さんともこの件について話をした。高体連は日山協の加盟団体でもある。日山協としても高体連は大事にしてくれている。何らかのメッセージを出していただくことも必要かもしれない。(大西 記)